

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	株式会社地域文化創造	
施 設 名	茅野市民館	
助成対象活動名	普及啓発事業	
内定額(総額)	3,634	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	3,634	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	茅野市民館をサポートしませんか2018	4月22日、5月3日、4日、10月12日、11月3日、12月1日、22日、1月14日、19日、27日、2月2日、10日、16日、22日、23日、3月2日、3日、25日	①This is 劇場 主な出演者：辻野隆之（茅野市民館ディレクター） ②Play to Play 「遊び」から「演劇」へ！！ ～高校生と市民のためのOMOSHIRO演劇講座～ 主な出演者：西田豊子（劇作家、演出家）、嶽本あゆ美（劇作家、演出家） ③舞台で音楽家は何を考えるか 主な出演者：杉本周介（チェンバロ奏者）、原謡子（ソプラノ歌手） ④動くよろこび 感じあおう 主な出演者：大手可奈（ダンサー、Gagaインストラクター） ⑤ことばのカ リーディング公演 主な出演者：藤井由紀（劇団唐組）、中山一朗、久保庭尚子 ⑥日常からドラマ みんなでワイワイふたいをつくろ！（全11回） 主な出演者：西田豊子（劇作家、演出家）、嶽本あゆ美（劇作家、演出家）、叶雄大（劇作・演出家、表現教育家） ⑦フロントスタッフ研修 主な出演者：辻野隆之（茅野市民館ディレクター）	目標値	660
		茅野市民館マルチホール、アトリエ、コンサートホール 介護老人保健施設「やすらぎの丘」、米沢地区コミュニティセンター		実績値	616
2	みんなの劇場 子供のためのシェイクスピア『冬物語』（茅野市小学4年生招待公演＋一般公演）	7月19日	⑧茅野市小学4年生招待公演 ⑨一般公演 主な出演者：板倉佳司、山口雅義、戸谷昌弘、若松力、キム・テイ、大内めぐみ、大井川皐月、山崎清介 スタッフ：山崎清介（脚本・演出）、山口暁（照明）、角張正雄（音響）、三大寺志保美（衣装）、小笠原響（演出補）、葛西百合子（舞台監督）、華のん企画（企画制作）	目標値	773
		茅野市民館マルチホール		実績値	641
3	ムジカ・タテシナ vol.9 山崎祐介×山宮るり子 ハープデュオ・リサイタル（ハープデュオ・リサイタル＋アウトリーチ・インリーチ）	5月6日、8月24日、8月25日	⑩リサイタル ⑪アウトリーチ「おでかけミニサロン」 ⑫インリーチ「レクチャーミニコンサート」 ⑬関係者向けサロン「みんなで接遇研修」 主な出演者：山崎祐介、山宮るり子、南部充央（バリアフリーイベントディレクター）	目標値	177
		茅野市民館コンサートホール、アトリエ 茅野市北部デイサービスセンター		実績値	228
平成30年度の目標値、実績値				目標値	1,610
				実績値	1,485

## 【妥当性】

### 自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

地域文化の創造に挑戦する茅野市民館は、集う一人ひとりの「気づき～想像～創造」サイクルを、「生」の触れ合いによって体感する、なんびとも開かれた、新たな生涯学習の「ひろば」である。多くの市民が、プレイヤーとなって、プレゼンテーションし、コミュニケーションする機会を公共として保障していくことが社会的な役割と考える。

茅野市は八ヶ岳連峰の西麓にあり、蓼科高原をはじめとする美しい自然に恵まれている。茅野市の歴史は古く縄文時代までさかのぼり、近代以降も、文化人の集まる「蓼科」という別荘地も形成されている。また、市の取組みとしては、公民協働の「パートナーシップのまちづくり」の理念と手法でまちづくりを進めている。茅野市民館では、その活動を支えるサポーターが活躍している。

茅野市民館は、市民の主体的な参画と文化的自立をすること、地域の文化創造を担う市民の層を広げていくこと、地域の文化的拠点として機能し愛される「劇場・音楽堂」として存在しつづけることを目指し、普及啓発事業では3つの事業を行った。1「茅野市民館をサポートしませんか2018」では、これまでの事業で生まれた地域文化活動の担い手のスキルアップと、これまで劇場に関わりのなかった人々を新たに招き入れ、協働しての創作に取り組み、劇場と地域の関わりをさらに広げる事業として進行することができた。2「みんなの劇場」（茅野市小学4年生招待公演、一般公演）と3「ムジカ・タテシナ vol.9」では、優れた演劇や音楽に触れる機会を届け、幅広い世代が「劇場・音楽堂」を身近に感じ、楽しむきっかけとなることを目指し取り組んだ。3におけるアウトリーチを含め、生の公演を体験する機会とし、文化芸術を愛する心を育むことを場とすることができた。なお、各事業の参加者数、サポーター登録の推移、茅野市小学4年生招待公演における累計鑑賞者数も指標とし、進めることができた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

茅野市の取組みとして、公民協働の「パートナーシップのまちづくり」の理念と手法でまちづくりを進めている。茅野市民館では、その活動を支えるサポーターが活躍している。サポーターが継続して学び、発信していく環境への期待があり、さらに新たなサポーターが生まれる環境をつくっていく必要がある。そして、既に劇場と関わりのある市民に加え、劇場と関わりの薄い市民（子どもや障がい者、外国出身者を含む）へのアプローチ、そしてそれを迎える劇場スタッフ・サポーターのコミュニケーション能力が必要である。

この状況をふまえ、普及啓発事業を行うにあたり目標を設定した。「企画制作や表現活動を主体的に行う市民の育成」、「劇場スタッフのコミュニケーション能力の向上を目指す」、「劇場と関わりの薄い市民へ劇場文化を繋ぐ」、「創造活動の魅力を伝える」、「新たな市民層が文化芸術活動に参加する機会とする」である。

これらの目標をふまえ、普及啓発事業を進めた。1「茅野市民館をサポートしませんか2018」は、2つの初心者向け講座、4つのステップアップ講座、1つの番外編（フロントスタッフ研修）で構成されている。これまでの事業で生まれた地域文化活動の担い手と、これまで劇場に関わりのなかった人々、そして講師らとの交流の場を様々な切り口で設け、企画制作や表現活動、創造活動に触れる活動にもなった。

また、3「ムジカ・タテシナ vol.9」におけるインリーチ、アウトリーチでは、新たな市民層へのアプローチや、創造活動の魅力を伝える場になった。2「みんなの劇場」と3「ムジカ・タテシナ vol.9」のリサイタルでは、アーティストにより優れた演劇や音楽を届けられた。劇場を核とした、これらの市民の交流や文化芸術の発信は文化の創造につながっており、またこれらの活動は、新たな需要や高い付加価値を生み出し、質の高い経済活動につながっていくと考えられる。

## 【有効性】

### 自己評価

目標を達成したか。

普及啓発事業は、1「茅野市民館をサポートしませんか2018」は①～⑦、2「みんなの劇場」は⑧⑨、3「ムジカ・タテシナ vol.9」は⑩～⑬で構成し5つの目標を掲げた。「新たな市民層が文化芸術活動に参加する機会とする」は①②が対応するがこの2つを初心者向け講座と設定し、①は大人を主な対象とし、②は高校生を主な対象とした。それぞれの参加の機会とすることができた。「企画制作や表現活動を主体的に行う市民の育成」は③④⑤⑥が対応するがこの4つをステップアップ講座と設定し「おと」「からだ」「ことば」をキーワードにワークショップ・公演で体感する機会を提供した。⑥ではワークショップや2ヶ所のアウトリーチ、館内での試演会の中で、市民の育成につなげることができた。「劇場スタッフのコミュニケーション能力の向上を目指す」は⑦⑬が対応するが2つの研修ではバリアフリーについて学ぶ、緊急時にスムーズな情報共有を図る研修により、コミュニケーション能力の向上につなげることができた。「創造活動の魅力を伝える」は⑨⑩が対応するがコンサートや演劇で本格的な音楽や表現にふれる機会を提供できた。「劇場と関わりの薄い市民へ劇場文化を繋ぐ」は⑧⑨⑩⑪⑫が対応するが⑧は茅野市小学4年生を招待する演劇を開催し、⑨は⑧の一般公演であったが日本語に加え5か国語が記載された上演ガイド、5か国語に対応したスタッフの配置、⑩はハープリサイタルにおいて視覚に障がいのある方々への音声ガイドとフォロースタッフの配置、⑪はハープコンサートのアウトリーチを市内福祉施設（デイサービスセンター）で開催、⑫はインリーチによるハープに関するレクチャーとコンサートに加え、楽器に触れることのできる時間を設けた。子どもから大人、障がい者や外国出身者まで様々な層の鑑賞者があり、劇場文化に繋ぐアプローチができた。以上、本事業を目標に対し有効に進めることができた。

## 【効率性】

### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。  
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

普及啓発事業は、1「茅野市民館をサポートしませんか2018」は①～⑦の7つの事業、2「みんなの劇場」は⑧⑨の2つの事業、3「ムジカ・タテシナ vol. 9」は⑩～⑬の4つの事業で構成されている。

1-①～⑥はワークショップと講座の事業、1-⑦と3-⑬は研修の事業、2-⑧～⑨、3-⑩は鑑賞事業、3-⑪⑫はアウトリーチとインリーチの事業であった。

事業回数（事業期間）でこれらの事業をみると、1-⑥は全11回であったが、その他の事業は1～2回であった。1-⑥では、3つの創作脚本を題材として、最終回の試演会に向けてプロの演出家3名による劇作演出の連続講座であった。2回のアウトリーチ（茅野市内の介護老人保健施設、地区コミュニティセンター※子ども対象）を含む連続講座であったことから、全11回は適切な回数であったと考える。その他の事業は1～2回であったが、新たな市民層の参加や交流のきっかけづくりや、文化芸術の発信の機会であったことからこちらも適切な回数であったと考える。また、事業回数の変更も1回程度の増減であったことから、当初の計画通りに進んだと言える。

次に、事業費については、当初の計画通りから変更があった。収入における入場料等収入も予算想定から減額となった。収入減であったことから、事業を進めていく中で、舞台費や宣伝費を中心に支出をできるだけ抑えるように努め、結果的に予算より2割程度の減額とすることができた。支出減額の中でも、出演費や謝金については、必要な金額をあてることにより、事業内容の質が落ちないように対応した。事業費に変更はあったが、当初の計画通りの事業をアウトプットすることができた。

## 【創造性】

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

茅野市民館は、管理運営において、実演芸術の特性である「表現者と鑑賞者の直接的コミュニケーション」を重視し、事業対象の年齢層や興味を注視した企画・制作を実施するとともに、鑑賞事業のみならず、より深い理解や感動を得るための体験的ワークショップ事業を組み込む。そして、市民の主体的な参画、文化的自立を目指し、地域の文化創造を担う市民の層を広げ、茅野市民館が市民の生涯学習や地域文化創造の交流拠点として機能し、愛される「劇場・音楽堂」として存在しつづけることを目指す。

1「茅野市民館をサポートしませんか2018」は①～⑦で構成される。①と②は初心者向け講座、③～⑥はステップアップ講座とした。③～⑤では「おと・からだ・ことば」を感じるシリーズとしてそれぞれが持つ力を体感し、楽しみながら掘り下げ、参加者自らが表現する喜びへステップアップすることを目指した。⑥では劇作・演出の基礎を学び、舞台作品を創作するために必要な要素を実践的に体験し、3つの作品を参加者の市民が上演した。その過程で2回のアウトリーチを行った。⑦については、フロントスタッフ研修の講座として位置付けた。

2「みんなの劇場」は⑧⑨で構成される。⑧茅野市小学4年生招待公演、⑨一般公演として、子供のためのシェイクスピア『冬物語』を上演した。⑧は学校教育現場と連携して継続実施している企画でもあり、平成30年度で7年目となった。市内に9つの小学校があり、茅野市民館が近い距離にある学校と遠い距離にある学校とでは、児童が芸術文化に触れる機会の差が生じる。演劇鑑賞、劇場に足を運ぶことが、生活環境に関わらず、地域全体として日常的になる機会やシステムを増やす必要がある。劇場という同一空間に同学年の児童が集い、公演鑑賞を通じて得た感情を共有することで、文化芸術を愛する心を育むことを目指した。また、都心・他地域からの移住者や外国人労働者が多い地域であるものの、地域文化や芸術文化との接点がないまま生活をしている県外・海外出身者も多い。地域にある“劇場＝自由に自己表現ができる場”を、誰もが享受できる環境を整えることを目指し、⑨一般公演を上演した。同公演では外国出身者を対象に「ウェルカムチケット」を用意し、当日は新たな取り組みとして、英語、ポルトガル語、タガログ語、中国語、韓国語の5か国語に対応した上演ガイドを配布した。また、5か国語に対応できるスタッフ5名を配置した。

3「ムジカ・タテシナ vol.9」は⑩～⑬の4つの事業で構成される。⑪では山宮るり子氏によるハープ演奏のアウトリーチを市内福祉施設（デイサービスセンター）で開催した。オーケストラに登場する「ハープ」（47弦）の演奏は珍しく、劇場がその音や楽器に触れる機会を届けることができた。⑫では山崎祐介氏のインリーチを行い、ハープに関するレクチャーに加え、実際に楽器に触れることのできる時間を設け、楽器本体の魅力を知る機会とした。⑬みんなで接遇研修では、子どもやお年寄りや障がいのある方など、誰もがいつでも気軽に、茅野市民館に出かけてくることができる環境づくりを目指し、リサイクルでのおもてなし実践を行うことを目標に、スタッフと市民サポーター等を対象とした接遇研修会を外部から講師を迎え開催した。⑪⑫⑬をふまえ、⑩リサイクルを開催した。一流のハープ奏者二人によるリサイクルにより、日常的には触れる機会の少ない音や楽器に出会う環境をより多くの市民に届けた。また、視覚に障がいのある方々への音声ガイドとフォロースタッフの配置を行った。

以上のように、良質な鑑賞事業や、様々なワークショップ・講座の中での創作や表現、学びの機会の提供、新たな市民層へのアプローチ、さらにバリアフリーと多言語への対応を行った。茅野市民館は、3つの普及啓発事業により地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮できたと考える。

## 【創造性】

### 自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

茅野市民館では「市民一人ひとりが主人公になれる場」を理念に、平成17年の開館以来、市民が主体的に地域文化・芸術の創造に取り組む体験型の研修プログラムを継続実施してきた。個性を受け容れ共感とともに創造する体験を積み重ねてきた成果として、地域文化活動の担い手が生まれ、演劇（おでかけ隊）やダンス（縄文おどり部）といった表現を、市民自らが劇場から地域に出向いて広める活動が始まっている。より多様な地域住民へ劇場文化の門戸を開くためには、様々な条件やニーズに合わせた表現の多様化や、質の向上が課題であり、文化・芸術に関連した様々な知識や技術を習得する機会が必要である。茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造は、代表取締役社長（茅野市民館ディレクター）および取締役のもと、総務部、技術部、事業部の体制で、技術・人材・情報等の資源を投入し、事業を進め、また市民の活動を支えている。

茅野市民館で開催する事業は、広く事業提案を募集し、事業に盛り込んでいる。平成30年度事業は、平成29年2～3月に募集を行い、34の個人・グループから52件のアイデアが寄せられた。茅野市民館スタッフからの提案も行なったが、その多くが市民からの提案であり、平成29年4月に行なわれた「茅野市民館 よりあい劇場 2017→2018」において提案者による公開のプレゼンテーションが行われた。平成29年度に市民を含む会議の中で内容を検討し、茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造の取締役会で平成30年度事業の決定がされた。

1「茅野市民館をサポートしませんか2018」は①～⑦で構成されるが、③舞台で音楽家は何を考えるか、④動くよるこび 感じあおう、⑤ことばの力 リーディング公演、⑥日常からドラマ みんなでワイワイぶたいをつくろ！（全11回）については、市民提案を盛り込んだものであった。提案した市民（市民サポーター含む）と一緒に打合せを行い、企画・制作を担った。さらに、⑥では、2回のアウトリーチ（茅野市内の介護老人保健施設、地区コミュニティセンター※子ども対象）を行い、高齢者と子どもから、試演した作品の感想をもらい、その感想を作品に反映させる手法をとった。

1「茅野市民館をサポートしませんか2018」の①This is 劇場では、公演がどのように作られるかを、リハーサル風景、開場中、開演という設定をする中で、舞台、楽屋、客席と移動し、参加者がその様子を見ることができるようにした。その設定の中で舞台の出演者を、茅野市民館のこれまでの事業で生まれた、多くの市民サポーターが所属する、おでかけ隊（演劇）に依頼した。②Play to Play 「遊び」から「演劇」へ！！ ～高校生と市民のためのOMOSHIRO演劇講座～ では、高校生を主な対象とし、その高校生を市民サポーターが支えた。①②ともに、これまでの事業で生まれた市民サポーターが、新たな市民層の文化芸術活動を支える事業とすることができた。

2「みんなの劇場」は⑧茅野市小学4年生招待公演、⑨一般公演として、子供のためのシェイクスピア『冬物語』を、3「ムジカ・タテシナ vol.9」は⑩山崎祐介×山宮り子 ハープデュオ・リサイタルを開催した。これらの公演のフロントスタッフは市民サポーターが担い、⑨における多言語対応は地域の外国語を話せる方に依頼し、⑩における障がい者への対応は、普段からバリアフリーの仕事に携わっている地域の方に協力を依頼した。市民サポーターが関わりながら、劇場と関わりの薄い市民へ劇場文化を繋ぐことができた。また、1「茅野市民館をサポートしませんか2018」の⑦と、3「ムジカ・タテシナ vol.9」の⑬は、市民サポーターがコミュニケーション能力を向上させる研修の機会となった。

以上のように、普及啓発事業の実施が地域の文化芸術の発展につながったと考える。

## 【持続性】

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

スポーツ競技のサッカーが地域の活力を生み出している。茅野から50km圏内にある松本市には「松本山雅FC」があり、アルウィンスタジアムを拠点としてホームタウンを形成し、プレイヤーの育成はもとより、多くのファン活動を生み、地域アイデンティティの一つとなるとともに、経済活動の発展にも貢献している。文化芸術活動の実演芸術において、サッカー競技における「スタジアム」の役割を果たすのが「劇場・音楽堂等」であろう。劇場・音楽堂等を核とするムーブメントの活性は、地域アイデンティティとなり、「豊かな暮らし」を支え、地域未来創生の持続を担保するものとする。

茅野市民館を核とするムーブメントの活性を目指すとき、地域の中で変化していく流動的なネットワークをリサーチし、茅野市民館が核、またはハブとなり、つながっていくことが必要であろう。今回の事業の中で、これまでの事業で生まれた地域文化活動の担い手である市民サポーターとともに、これまで劇場に関わりのなかった市民を新たに招き入れることを試み、つながることができた。多言語対応にあたっては5か国語を話せる地域の方に依頼をした。それぞれの言語を話す外国出身者のネットワークに触れる機会となり、今後の継続的な連携と組織化の手がかりを得ることができた。バリアフリー対応については、普段からバリアフリーの仕事に携わっている地域の方に協力を依頼した。事前にバリアフリー研修を行い、フロントスタッフを務めた市民サポーターとともに迎えたが、障がい者やヘルパーの方々のネットワークを知る機会にもなった。

茅野市民館はPDCAサイクルの中で組織的に流動的なネットワークとつながり、そのための事業を更新し、さらにつながり、また別のネットワークとつながる。そのような終わらない変化を組織的にしていく必要があり、平成30年度の事業においても組織的に持続的に、そして発展的に事業を行えたと考える。